

Title	萬物流轉(平泉澄著, 至文堂發行)
Sub Title	
Author	淺子, 勝二郎(Asako, Shojiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1937
Jtitle	史学 Vol.16, No.1 (1937. 4) ,p.160- 161
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19370400-0161

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

るので此處には省く。次は「石敢當追考」で鹿兒島の石敢當に就て述べ、第三には「古代の社會救濟事業」として行基の布施屋に就て述べ、第四には「中世の漂泊民衆」として傀儡子がジプシイの様にヨーカシャ系印度種で、我國に原史時代以前に渡米したものであらうと云ふ可成大膽な推測が下されてゐる。然し之の言語的の證據は未だ充分に吾人を納得せしむるに至らない。第五は「文藝を通して觀た平安時代晚期の社會相」であり、玉葉と方丈記とを比較し、第六は「羅馬加特力教徒の執拗な信仰傳承」で珍奇な資料を紹介し、第七は「下り酒情調」とて江戸時代に於ける酒趣味の變遷、下り酒の移入経路等を論ぜられてゐる。

何れの諸論も極めて快明平易に記されてゐるので讀者は氣輕に讀了することが出來、著者が廣大な分野に汎る智識慾の持主であるのに驚くだらう。趣味的の讀物を漁る讀書子に本書を推薦したい。(松本信廣)

靜に人生を觀じ、歴史を思ふとき、パンタ・レイ (Panta rei) の一語は、動かすべからざる鐵則として、歴史を貫通し、人生を支配せるを知るであらう

と、無常の嵐はすべてのものに吹き荒む。希臘二千年の歴史も、その前後同一の人種にして、しかもその變移に驚かされないものはない。外國に壓迫せられ、病魔(ペスト)に侵され、異民族(スラヴ族)に侵入せられて、たとへその血統は先祖より傳はつてゐるにしても、その優れたる力は遂に見る能はざるに至つたのである。

萬物流轉、あわただしき變幻のうちに、我等は茫然自失すべきか。否、我等は流轉のうちに在つて不易なるもの、萬世を通じて常住なるものを求めなければならない。佛教に所謂諸行無常のうちに、常住不滅なるものを求めなければならない。

最後のよりどころとなる確乎不拔の盤石不易の準則は何であるか。博士は根本通明博士の易の思想を以てこの疑問に答へられる。「易は易、即ち變易であるが、同時にまた不易であり常住である。自然界に於いて之をいへば、天、上に在りて尊く、地、下に在りて卑しく、こゝに乾坤定まる。これ即ち不易である。故に乾坤の二卦を畫して、以て不易の卦としてあるのであつて、是れ即ち君臣父子、定位ありて易ふべからざるの象である。忠孝の道、是に於いてか生ずるのである。易の眼目すでにかくの如くであれば、人倫を明かにし、天下を經綸するに、最も切要なるものは、即ち易なりといはなければならぬ」

と、博士は更に室鳩巢と遊佐木齋を拉し來つて、流轉變化と不平泉博士には「我が歴史觀」なる舊著がある。本書は名前こそ「萬物流轉」であるが、その實博士の人生觀であり歴史觀である。さて「我等は既に、長柄の橋の盡きたるを見、不破の關屋のあれ果てしをなげき、永遠の都羅馬の地下に埋れ、不朽の神殿パルテノンの荒廢に驚き、萬物流轉の説、之を希臘の哲人に聽き、諸行無常の教、之を印度の佛陀に知つた。人生かくの如し。歴史かくの如し。

變不易の矛盾對立を論ぜしめる。就中、我が神州は天地と共に開けて後世の建國ではない、即ち未だ曾て勃興なきが故に、滅亡といふ事斷じてあるべからず、されば寶祚は天壤と窮なく、無比の國體、威を以て奪ふべからず、力を以て争ふべからず、逆を以て立つべからずといつたやうな意味の木齋の論議は、倫理の根本を確立し、神道の本旨を闡明したものとして注目に値する。

最後に博士は谷秦山先生の事蹟をかりて、孝の道は一切の學問の最後の歸趣であると共に、一切の學問はこゝから出發する。唯その間險難の一路あるのみ。一生を費して、しかも容易に盡すべからずといつてをられるのである。

以上本書の内容の概略であるが、應用歴史の立場をとられてゐる（様に思はれる）平泉博士の説としては或は時流に投じたものであらうが、純粹歴史家よりしては容易に首肯し難い點があるだらう。たゞしかし萬物流轉に心動かされながら、しかも之を靜觀し、長柄の橋の鉋屑にも、勿來の關の「なこそ」の意義にも大いなる關心を持たれるのである。

つのくにのなからのはしもつくるなり
いまは我身を何にたとくん

の「つくる」を盡の義とし、長柄といふところから永久常住の連想があり、そこから一轉して盡といふ語が出て来る、といはれたのも卓見であるし、枕草紙の能因と節信の重寶の贈答、能因の長柄の橋の鉋屑から、それが再建されずに亡んだといふ解釋も鑿ち過ぎた嫌ひはあるが面白い。又不破の關を語り、三關整備の動機が壬申の兵亂に在つた事から考へても、また軍防令の規定から

見ても、これらの關が軍事上の必要から置かれ、國防的意義を有つてゐるものであつたことは明かである、勿來の關も本來、東北地方未だ王化に潤はざる勢力の南侵を防ぐのが目的であつて、「なこそ」は實に意味を率直に表明したもの、従つてそれは固有名詞といふよりは、むしろ普通名詞であつたとし、更に不破の關が關料を徵收してゐたといふことに就いて、當時の關は其の本務とする國防以外に、或は自ら其の國防の内に含まれて、人民の移動を禁じてその土着定住を強制し、治安の維持を圖る任務を持つてゐたと説いてゐる點など興味ある所である。（菊判本文二五七頁定價貳圓）（淺子勝一郎）

Europe, A Geographical Survey of Europe,

by J. F. Bogardus. New York, 1934.

歐羅巴地誌に關する著述は非常に多いが、然し全體がよく纏つてゐて、一國々々に就ても細かい地域に分ち、その地域的な敍述を施しながらも全體的な考察を輕視せず、現在の政治や經濟の狀態を明確に把握せしめるやうな種類のものとなると比較的少ないやうである。最近筆者が手にしたやうの中にも、例くば、A Geography of Europe, by R. Blanchard, translated by R. E. Crist, New York, 1934. & Europe, A Regional Geography, by M. R. Shackleton, London, 1934. なんの如き良書があるが、前者は主として自然地理に重きを置いて居り、どちらかと言へば人文現象の方面が輕視され過ぎた嫌がある。殊に或る一國に就て見れば、それを多くの小地域に分ち、殆どその地域的